第弐

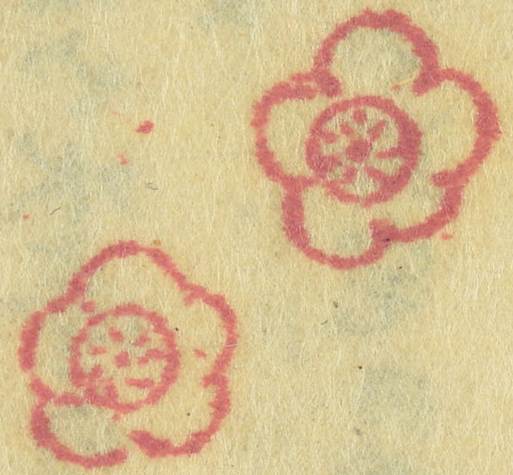
昭和二十二年版

紅梅集

半面會刊

美へのあがき

半面會を創設してはや足
掛三年となる実に月日は
早い、この東の間に多田時
雨郎兄を二十年の暮に二
十一年の春には今井江坡
君を喪ったことは誠に半
面會として多大の損失で
あり、殘念でもあり痛まし
い限りであった。せめてこ
の可愛ゆい遺本句集「紅
梅集」一卷を両兄の靈に



捧げ、聊かむすりとも慰めて
あげたいものである。

昭和二十二年 初夏五月

千葉新舞子庵にて　紫江

紅梅や水亭の徑を荒るるまま

紅梅や邸宅の薄さゝかまびすし

細田源吉

紅梅や古き湯舟の思出に

紅梅にシナリオを書く女かな

大島寶水

紅梅や菅家の家の紋どこ
ろ

中道に紅梅ひらき薫じけ
り

三上　六邨

紅梅や死後も名に迷ふ何
碑

左右の手に買物篭と紅梅
一枝

吉原　山水

鶯ぅ来ぬ紅梅の枝かな
る

紅梅に行かばや友の待つ

旅路

寺詣　修峰

本棚に紅梅飾る休みかな

紅梅をかぎしてをみな野

辺をゆく

安倍　弥衆

燒けこびし廃墟に一もと
紅梅咲けり

紅梅のしつとり濡れて朝
靜か

安倍 空然

明け暮れの豊かに紅梅咲
き滿ちて

紅梅に眩しき陽ある海邊
かな

山岡 徐林

紅梅や小雨そぼふる朝の庭

紅梅や目ざしぬくとき蕚充

高橋 友鳳子

紅梅の花盛りなる雪の翠れ

紅梅や一きわ目立つ蕚の中

遠藤 尤水

紅梅や嫁一人が陽に遊ぶ

紅梅や垣をのぞいたばけのこと　長村　殘雪

遠くより紅梅あかし乳母の里

紅梅や靜かに暮るる家光　岡村　とみ子

紅梅や街角にある石佛

紅梅や風車は風にただ廻る

水谷 美馬

紅きくしうつらめ啓へ梅

ゝ

うらめ藤たれやよれ藤紅

し

水上 傳近

脇寺に紅梅の咲き九品佛

紅梅に血潮の石や泉岳寺

笹尾　政擧

紅梅や目元口もと母に似て

紅梅やしくさくのあとも無く夢に

三橋　葉舟

月ほどの紅梅の香を慕ひ
来る

紅梅や思念の窓陽うつつ
なに

圓谷 黄陽子

紅梅や覓の水のきよらひ
に

紅梅や尼僧の眉のうつく
しき

嵩田 筑波

紅梅や女を護る白本髮

紅梅や雪少しあるもゆか
しき

田中竹堂

紅梅や美しき鳥来へよる

陽さしとゝきゝ紅梅近く椅子
を置く

大内雨香

煩惱を歌ふもよろし紅梅
に

紅梅やその讀みしより愈
ごころ

廣瀬香魚

紅梅や香ふ茶室の古書を
讀む

梅かほる室にほしさの玉
露かな

繁田文亭

紅梅やうつくしきその秋
な光る
紅梅の軒に興添え影うれ
し

磯ヶ谷 紫江

三人集

野蒜摘み多摩の墳に日の暮るゝ

草木外に長吏廓に畫深し

高麗高麗子

蝶舞ふや樂園は墓に隣れる

夏雲や大樹にふるゝ人の呼吸

今井江坡

わが心高空に春駒を駆す

蝶見る日ふと兜酒を酷め

てみる

多田寺雨郎

昭和二十二年七月十日発行
郷土「紅梅集」限定百部
非賣品
千葉市稲毛町一丁目八七三
発行者　磯ヶ谷紫江

歌信「稲毛」　月五回発行

○隨時隨想を歌信によって傳ふ

稲毛通信　月一回、年四回増刊

○墓碑、史蹟、金石の研究他

に資料等をのせます。

○

紫香會報　年四回発行

紫香會誌　年四回発行

○文藻と挿花、趣味と座談の会です。会費は連絡に、会誌は株式論文を載せます。

昭和二十二年版

紅梅集

平面會刊